

まきむく

纏向
考古学通信
Vol.14
2020.09



奈良県立橿原考古学研究所 提供

東田地区、纏向大溝の井堰実測風景（纏向遺跡第6次調査）1971年

特集 | 纏向遺跡 発掘調査200回目前記念!

発掘の軌跡をたどる Part1

纏向幻想 - 卑弥呼に会いに行く(1) -

令和元年度まきむくレポート

発掘された纏向遺跡R1

まきむく裏物語：木製仮面の発見②

発掘の軌跡をたどる part1



第1次
(1971年3月)

「纒向遺跡」発掘調査のはじまり



纒向大溝*

纒向大溝の発見(4・6次)

現在も纒向小学校の校庭に眠る「纒向大溝」は、人の字形に合流する2本の直線的な溝で構成される。長さ140m以上、矢板による護岸、水量調節機能を備えたこの溝は、物資運搬のための水路とする考えが有力。纒向遺跡の数多の遺構の中でも最初期の3世紀初頭に属し、大規模集落の出現を考える上で重要な遺構である。 (1971-72年)



辻土坑4*

纒向の祭祀土坑群(7次)

纒向遺跡には「纒向型祭祀」と呼ばれる土坑祭祀がある。その特徴は、土坑が湧水点まで深く掘下げられており、内部には多くの土器のほか多種多様な木製品や種子が投棄されていることだ。木製品には焼け焦げたものも含まれており、火と水を用いた祭祀が行われていたと考えられている。7次調査では、埋没河川(辻河道)の南岸から21基もの祭祀土坑が検出された。その中の一基、「辻土坑4」には『延喜式』新嘗祭の条の器材と共通点が多いと指摘されている。

墨書土器「□市」(5次)

この調査は、旧河道地帯で行われた。7~8世紀のものとみられる濠状の溝から出土した墨書土器には、欠損のため1字しかわからないが「□市」と記されている。この文字から、『日本書紀』の箸墓築造の説話に登場する「大市」という地名ではないかと考えられている。纒向遺跡が物資の交流の大拠点であることを示す一助になるかもしれない。 (1971年)

図の出典 石野博信・関川尚功『纒向』
桜井市教育委員会,1976

第4次～第7次

旧纒向村の多くの大字にまたがって遺跡が存在することが判明

第8次

発掘調査報告書
『纒向』の刊行

「纒向遺跡」と命名

第42次

第47次

寺沢薰氏 論文『纒向遺跡と初期ヤマト政権』
ヤマト王権の最初の都宮として位置づけられる



弧文円板**

「最古の古墳」 纒向石塚(6・8次)

纒向小学校建設に先立つ周濠部分の調査(第6次)により、一躍「最古の古墳」として注目されることとなった纒向石塚古墳。その後現在に至るまで9次に渡る調査が実施され、3世紀代の前方後円墳であることが確定している。出土遺物は多彩で、なかでも特殊な文様が施された弧文円板(第8次)は、吉備地域との繋がりが想起され注目される存在だ。 (1975年)



メクリ I 号墳(47次)

遺跡中央の太田微高地で見つかった全長27m、3世紀中頃に築造された前方後方墳。前方後方墳成立の地に前方後方墳が存在することの意味は?

(1986年)

(1972年)

巻野内坂田地区の埴輪群(42次)

4世紀代の古墳が少ない纒向遺跡では貴重な埴輪資料。鶏形埴輪は最古・最大級、特殊な形状の冠帽形埴輪、大型の朝顔形埴輪が存在するが、円筒埴輪が出土していない点が特徴的。古墳にともなうものかどうかは不明だ…。 (1985年)



鶏形埴輪



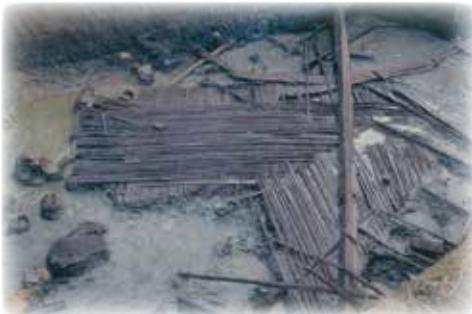
冠帽形埴輪

第65次調査の尾崎花地区では、纏向遺跡の中でも数少ない絹製品が出土したよ!



倒壊したまま出土した建物(51次)

太田南飛塚地区では埋没した古墳の周濠の一部とみられる溝を発見。布留0式期(3世紀後半)の土器とともに、倒壊したままの建築物も出土。祭祀行為にともなうものだろうか…? (1987年)



第50次、第51次

第59次



貴重な住居跡の検出(59次)

太田北飛塚地区で3世紀中頃に構築された1辺5mの竪穴が検出された。纏向遺跡では竪穴式住居跡の検出例が殆どなく、貴重な発見だが、炉跡や周壁溝がないなど、通常の住居跡と異なる特徴を持つ。(1991年)

国内最古のベニバナ／バジル花粉(61次)

太田李田地区発掘時、3世紀前半の溝より国内最古のベニバナとバジルの花粉を検出した。ベニバナは染織用、バジルは薬用に用いられ、当時の最新技術とともに大陸より伝来してきたとみられる。高度な技術を携えた技術者集団を纏向遺跡の首長層は抱えていたのではないだろうか…? (1991年)

-Introduction-

ヤマト政権発祥の地、あるいは邪馬台国候補地として全国的に有名な纏向遺跡。今回は“発掘調査第199次到達!200回目前記念”として、1971年から現在までの調査をいくつか取り上げながら振り返りたいとおもいます。前後編の2部編成でお送りします。



箸墓古墳の墳丘端を確認(81次)

箸墓古墳の発掘調査ではじめて墳丘端の位置が確認された。現在墳丘端が確認できたのはこの前方部北側面のみである。

また、はじめて原位置にある葺石が前方部北側面の墳丘裾斜面を覆うように発見された。

古墳の葺石は瀬戸内海や山陰地域の弥生墳墓の要素を基として大和の地で成立したと考えられており、箸墓古墳は前方後円墳の中でも最も早く葺石を採用した古墳の一つである。 (1994年)

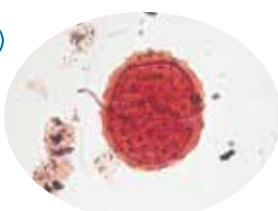


前方部北側の葺石(北西より)*

第61次

第80次、第81次

第90次



ベニバナの花粉



韓式系土器



導水施設

卷野内家ツラ地区の導水施設・韓式系土器(50・90次)

第50次調査で検出された導水施設へ水を供給する大溝の下部にある、3世紀後半のV字溝から韓式系土器が出土した。第50次調査時には、黒漆で仕上げた孤文板も発見されており、これらは導水施設より古い段階の祭祀に使用されたものと考えられる。

この地区的導水施設は周囲の水路から浄水を集め祭祀を行った場かと考えられる。(1987-1996年)



写真：内田康夫氏との談話（1999.11）

この通信がリニューアルされるということで穴埋めの一文を仰せつかった。連載ならなお佳し、とのことだ。この通信には今までにも、何度か所長としてのまじめな発信はさせていただいたが、はてさて、連載ともなると肩の凝らない自由で楽しいものがいい。

柵考研を退いて準備段階を含めると今年で10年、たいしたことはできなかつたけれど、曲がりなりにも史跡指定と保存、調査や研究ではそれなりの成果を上げてきた。今では「学」としての邪馬台国候補の筆頭を占めるまでになったと自負している。ガイダンス施設の建設と整備だけは思い通りには進まず、老朽化のためついに引っ越しとなり纏向から離れることとあいなつたが、まあそれもそのうち何とかなるさ、と楽観している。

よくある想い出話、よもやま話・・・、書くことはあまたあるけれど、学センターに特化した話となるとやはり纏向談義か。隨想・邪馬台国、隨想・卯弥呼・・・。ふだんなかなか書きにくいことでも、とりとめもない作文なら筆が滑るかもしれない。私も、読者も想像が創造をかき立てることになればおもしろい。そんな気がしてきた。

ちょうど20年前、作家の内田康夫さんが「オフィス浅見」の秘書のかたや祥伝社の方々と訪ねてこられた。お得意の歴史ミステリーに箸墓古墳を取り上げたいという。発掘のこと、考古学のこと、学界のこと、いろいろアドバイスしてほしいとのことだったので、おもしろそうだと引き受けた。

何度か取材を受けるなかで、発掘中のホケノ山古墳が見たいという。上司と協議したが、ちょうど埋葬施設の発掘が佳境に入ったところで、地元記者もシャットアウトしている状況では遠巻きに見もらしがしかなかった。

ちょうど画文帶神獸鏡が出土していたが伏せざるを得なかつた。のちの回顧録で内田さんは「うまいこと煙に巻かれた」と述べている。記者発表後に見学された時にはすでに連載は始まっていた。もし連載前に察知されいたら小説の流れは違っていたのかもしれない。ホケノ山古墳出土の画文帶神獸鏡が、じつは過去に箸墓古墳を盗掘した時の代物であったことをいち早く察知した、畠傍考古学研究所調査課長の平沢徹も殺されずにすんだのかもしれない。その後何度もお会いしたけれど、そこの所は亡くなるまで聞きたくて

も聞くことができなかった。小説のタイトルは「箸墓幻想」と名付けられた。ならばこの通信の穴も、とりとめのない幻想で埋めてみようか。

引っ越しでガランとした旧所長室でふと外を見ると、陽光が校舎の木々の緑を照り返し濃淡が美しい。時折、校庭からコロナ禍の鬱憤を晴らすように子供たちの雄叫びが聞こえてくる。1800年前のこの地で、卑弥呼はどのような声を発しただろうか。卑弥呼を取り巻く空気の音、臭い、色はどんなだっただろうか。

タイムマシンがあるなら真っ先に卑弥呼に会いに行きた。これほどまで時間と空間のポイントを突き止めたのだから、よもや会えないことなどあるまい。この連載はいつか卑弥呼に会うための予行練習としよう。

卑弥呼は確かに不思議な女性である。というよりも得体の知れぬ女性である。卑弥呼の人となりや日々のようすを知る手だけは、倭人伝に残されたわずかな情報だけだ。「倭の女王」、「鬼道を事とし、能く衆を惑わす」、「年已に長大」、「夫婦なし」、「男弟有りて國を治るを佐く」、「王と為りてより以来、見る有る者少なし」、「婢千人を以て、自ら侍せしめ」、「唯、男子一人有りて、飲食を給し、辞を伝え、居処に出入りす」、「宮室は樓觀、城柵を嚴かに設け、常に人有りて、兵を持して守衛す」と。

さあ、そこからあなたはどのような卑弥呼像を描くだろうか？ 私と一緒に幻想・卑弥呼を綴ってみようではないか。もちろんなるべく史実を外さずに。

まきむく裏物語

いくつかの“偶然”が重なり、わずか1日の調査で発見に至った纏向遺跡の木製仮面。その短い調査の間にも、予想外の展開が待っていました。

当日の朝、池の底でみつかった土坑を掘り下げるとすぐに、朱塗りの楯の破片や鎌柄などの多量の遺物が姿を現しました。思わず遺物量に驚きましたが、池底に辛うじて残された土坑は、それほど深いものとは思えません。ここが「本丸」と考え、時間をかけて丁寧に検出しました。

木製仮面の発見②

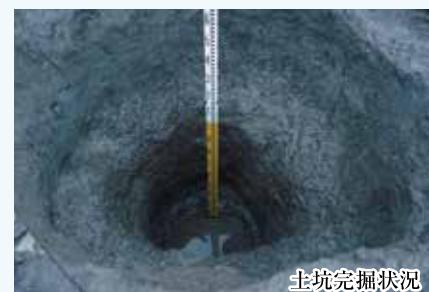


た。午後3時頃に遺物を取り上げ、これで調査は完了、と思いきや…土坑の底はまだ見えません。土層の記録をとりながら懸命に掘り下げ、完掘した時には午後7時を過ぎていました。結果的に土坑の深さは約1.5mに達し、その時掘り下げた土坑の下層埋土より、1点の木製品が出土しました。

調査担当者のささやかな特権は、未知の遺物と出会う驚きや感動を真っ先に味わえる点にあります。ところがここに、もう一つ「予想外」が待っていました。6月とはいえ、あたりはすでに真っ暗。現地で形状を確認する間もなく、泥に覆われたまま木製品を持ち帰りました。やがて、ユーモラスな形状に最初に気付いたのは、その日遅くまで残って遺物を洗浄してくれた私の同僚H氏。私のささやかな特権は、見事にさらわれてしまいました…。

偶然の巡り合わせと、予想外の展開が重なった木製仮面の発見。発掘調査の難しさと醍醐味を同時に味わうことになった2日間でした。

(福辻 淳)



土坑完掘状況

纏向学セミナー

年2回、纏向学に関連するテーマで外部より招いた研究者の講演後、寺沢薰所長と対談いただく企画です。

2019年7月13日に第13回「神社のはじまりと纏向の王宮・王権」と題し、黒田龍二先生を、2020年2月1日の第14回「古墳時代祭祀遺跡と伊勢神宮の原像」は穂積裕昌先生を招き、開催しました。来場者はどちらも約260名を数え、普段聞くことのない論説に興味深く、熱心にお聞きっていました。



「ヤマトの古墳と遺跡～ヤマトの源流を考える～」

桜井市と天理市、そして田原本町、三宅町、川西町の5市町が共同で地元のPRをおこなうイベント「ヤマトの古墳と遺跡～ヤマトの源流を考える～」が2019年7月22日～28日に東京都、日本橋の奈良まほろば館にて開催され、会期中の27日、28日はウイークエンドスペシャルとして講演会やワークショップを開催しました。

桜井市は飯塚所員が参加し、2日間で約280名の方にご来場いただいた講演会にて纏向遺跡での最新の調査成果の紹介をおこないました。また、ワークショップではオープン粘土による勾玉づくり体験も、親子連れをはじめとして、思い思いの色や形の勾玉づくりに沢山の方で賑わいました。

纏向考古楽講座

毎年全3回のシリーズで開催している、考古学に馴染みのない方も参加しやすい講座です。令和はじめての講座は、記紀万葉の歌碑をテーマに纏向遺跡に親しんでいただこうと開催しました。

2019年9月21日、11月9日の開催(10月予定の第2回が台風接近のため中止)となりましたが、参加者は考古学の基礎知識を学ぶだけでなく、「拓本」を探るという実践メニューにも意欲的に取り組まれ、貴重なひとときとなりました。



東京フォーラムⅧ「卑弥呼」発見!

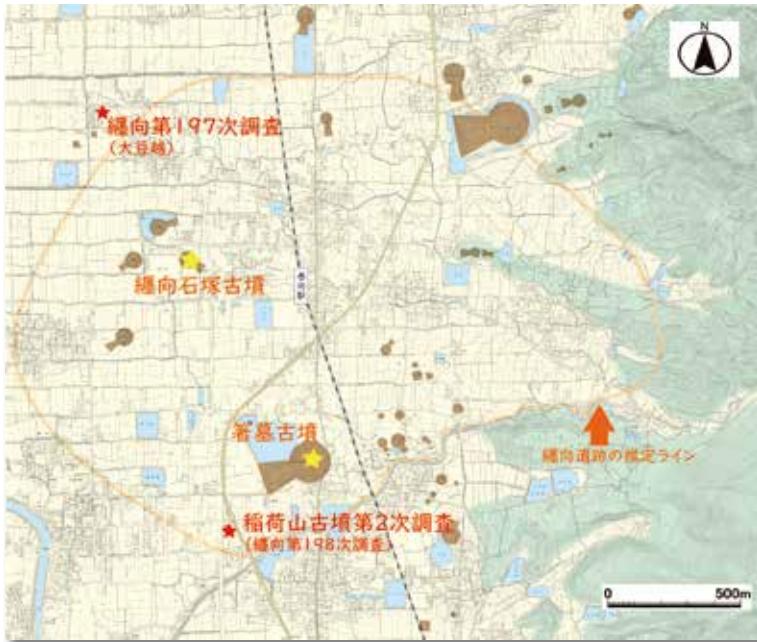
卑弥呼の宗女台与、年十三なるを立てて王と為す－卑弥呼その後－



2019年10月27日に東京都千代田区有楽町のよみうりホールにて、「卑弥呼」発見!シリーズの最終回「卑弥呼その後」として、台与が立った背景や、台与と男王の関係、東アジア史の視点を含めた様々な角度から、4名の講師に講演いただきました。

講演の後には、寺沢所長の司会・進行により講演いただいた先生方とシンポジウムを開催し、『魏志倭人伝』の内容を参照しながら、台与の人物像やそのお墓に関する推論だけでなく、二人の女王の間に立った男王がどのような人物だったのか等々、僅かな記述しかない卑弥呼のその後について、様々な議論が交わされました。

発掘された纏向遺跡R1



桜井市大字大豆越において実施しました。この調査は宅地造成工事に先立っておこなわれた発掘調査です。今回の調査は桜井市の北西部、天理市との市境付近に位置する二反田古墳の北側で、道路予定地の中央に第1トレーナーを、その北側に第2トレーナーを設定し調査をおこないました。

調査の結果、第1トレーナーで河川の南岸を確認しました。この河川の堆積からは遺物が出土していないため詳しい時期はわかりませんが、埋土上面から中世の素掘り溝や古墳時代前期の遺構が掘られていることから、古墳時代以前の堆積と考えられます。また、古墳時代までの調査地周辺は、河川の影響を強く受ける場所であったと考えられ、居住するには適していない土地であった可能性があります。今後の調査の進展によって、調査地周辺の土地の利用状況や地形が明らかになることを期待したいと思います。

(西村知浩)



▲西側調査区 墳丘盛土上の石(北西より)

纏向遺跡第197次調査

期間：2019年12月28日～2020年1月22日

面積：76m²

稻荷山古墳第2次

(纏向遺跡第198次調査)

期間：2020年1月9日～2020年2月12日

面積：23m²

◀令和元年度発掘調査地

纏向遺跡第197次調査



▲第1トレーナー東壁土層断面(北西より)

稻荷山古墳第2次調査

(纏向遺跡第198次調査)

稻荷山古墳は、現況で直径約20m・高さ約3mの高まりが残っている古墳で、墳丘上には稻荷社が祀られています。

平成30年度に纏向遺跡第196次(稻荷山古墳第1次)調査がおこなわれており、古墳の北東付近で方形のコーナー部分が見つかりました。

7ページへ続く→

のことから、現在は円丘状に見えますが方形の古墳であることがわかりました。さらに、明治20年代に大和の古墳を描いた『古墳墓見取図』という絵図があり、この絵図に描かれている稻荷山古墳には古墳の南側に細長い高まりが確認できます。この絵図と第1次調査の成果を合わせて考えると、稻荷山古墳が前方後方墳である可能性が考えられました。そのため、今回は古墳の西側と南側に調査区を一か所ずつ設定し、絵図に描かれている南側の高まりの痕跡を確認するために発掘調査をおこないました。

調査の結果、西側の調査区の東端の墳丘盛土直上からは約40点の石が貼り付いた状態で出土しました。この石は斜面全体で検出したわけではなく石を固定するための裏込め土なども確認できなかったため、葺石であると断定することはできませんが、古墳にともなう石である可能性が考えられます。



○information○

纏向学研究センターは7月1日より
事務所を下記へ仮移転しました。

移転先：奈良県桜井市三輪686 芝運動公園内

当センターホームページは一部
桜井市ホームページへ移行しました。
詳しくは市ホームページをご覧ください。

<https://www.city.sakurai.lg.jp/>

編集後記

2020年、当センターは仮移転し、本誌も心機一転リニューアルを目指しました。今後も様々な企画を通して、読者の皆さんにわかりやすく楽しく伝えられたらと思います。

今後も当センターとともに本誌をよろしくお願いします！

編集担当：立石千紘

南側の調査区では、現在の古墳の斜面(東西方向)と調査によって確認した墳丘盛土の斜面(北西-南東)の方向が違っていることがわかりました。この斜面について古墳を造った当時の形態がそのまま残っていると断定することはできませんが、第1次調査で想定した古墳の南辺と方向がほぼ一致していることから、造った当時の形態に近い古墳の方丘部分の南斜面を検出したと考えられます。

今回の調査では、調査区全体で墳丘盛土を確認しており、現在復元できる方丘部の大きさは北西-南東方向に約26m、北東-南西方向に30m以上ということがわかりました。このことから、第1次調査で想定していた通り、稻荷山古墳が南西側に長い形態をしていたことは確かであることがわかりました。

(三沢朋未)



展示収蔵室からのおしらせ

from 桜井市立埋蔵文化財センター

2020年9月30日(水)～12月26日(土)の期間にて特別展を開催します。詳しくは、桜井市立埋蔵文化財センターホームページをご確認ください。

► <http://www.sakurai-maibun.nara.jp>

開館 9:00～16:30(入館は16:00まで)

休館日 毎週月・火曜日及び祝日の翌日

入館料 一般400円／小中学生200円

(20名以上の団体は一般300円／
小中学生150円 市内在住の小中学生は無料)

所在地 奈良県桜井市芝58-2

問合せ TEL:0744-42-6005

纏向考古学通信Vol.14

発行・編集 桜井市纏向学研究センター

発行年月日 令和2(2020)年9月1日

所 在 地 〒633-0001 奈良県桜井市三輪686

芝運動公園内

TEL/FAX 0744-45-0590

*纏向考古学通信は倭国王ご公認のもと、「卑弥呼の里・桜井ふるさと寄附金」を活用して作成し、ご寄附いただいた方に配付しています。